

2-2		主題	365日×3年のマーチ	
ケアの質の向上		副題	前頭側頭型認知症（ピック病）発症利用者とのコミュニケーション	
マンツーマン対応				
研究期間	36ヶ月	事業所	練馬高松園デイサービスセンター	
発表者：藤田由美子 ふじたゆみこ			アドバイザー：西舘早苗 にしだてさなえ	
共同研究者：東郷竜二 とうごうりゅうじ 富澤聡 とみざわさとし				
電話	03-3926-3026	メール	info-n@tfk.or.jp	
FAX	03-3926-7872	URL	http://www.tfk.or.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	当園は大正8年に設立した社会福祉法人東京福祉会が、平成12年4月に介護福祉施設を開設し、デイサービス42名（一般30名・認知12名）特養97名、ショートステイ13名、地域包括支援センター支所、在宅介護支援センター、居宅介護事業を併設した今年で開設10周年となった高齢者福祉施設です。練馬高松園経営理念「私たちの願いは利用者の笑顔、家族の笑顔、職員の笑顔、そして地域の信頼です。」
------------------	---

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>〇さん。67歳、女性。要介護度3。自宅での物忘れや徘徊等の症状あり。H19/4/25 利用開始。利用初期は集団行動にも加わり、色々な活動に参加されていた。</p> <p>半年経過した頃、集団行動や他者とのコミュニケーションが困難になる。活動等着座して過ごす事が困難であり、1日中歩き回る常同的周遊行動の症状が出てくる。その他、発語なく表情も険しく、入浴等強い介護拒否、一人で外へ飛び出す、他人の事を気遣わない等の脱抑制（周囲への迷惑を顧みずにわが道をいく行動）。</p> <p>マンツーマン対応をするが本人の身体的疲労も著しく、他利用者からも〇さんの言動や行動に不快感や、クレーム等あり。</p> <p>H20/4/12、頭部MRIで前頭葉の委縮、老年期認知症、FTD（前頭側頭型認知症、ピック病）の疑いありと診断。今後どのように氏のケアを行っていくか課題となる。</p>	<p>《研究の目標》</p> <ul style="list-style-type: none"> マンツーマン対応し、〇さんの心理状態を読み取りサービス提供のニーズを探る。 心地良い居場所の提供。 介護の工夫に職員一丸で力を注ぐ。 地域との関わり、連携。 <p>《期待する成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> 〇さんが笑顔になる。 「寄り添う介護」の大切さ。 問題となっている脱抑制、常同的周遊行動等の軽減を図る。 他の困難事例の利用者に対しても、〇さんの事例を通じて、落ち着いた対応が出来る。
--	--

《具体的な取り組みの内容》

- 落ち着かず着座出来ず、積極的な散歩
- 車中では比較的着席可能な為、送迎等で乗車し体を休める環境を提供。
- トイレトペーパー畳み実践。(大切なものを感じているような発語あり、一枚一枚を丁寧に折り畳み重ねる)
- 近くの公園等でどんぐり拾い。
- お手玉・ビーズ通し・あやとりの実施。
- 歌が上手であり、カラオケ等一緒に歌を歌う。
- 体を使った運動(卓球、ボール投げ等)
- 強い入浴拒否に対して、気分が良くなるような上記の活動等を提供してから入浴誘導。
- 個別支援マニュアルを作成し、対応方法に關しても職員間で統一したケアが行えるよう人的環境を整える。
- 施設前の道路が主要道路であり、通行量も多い為、正面玄関の自動ドアを飛び出して自主外出をしないよう、内側からの開閉を押しボタン式に改修。(費用：電気錠¥220.311 円)
- Oさんが認知症フロアを歩き回る関係で、他利用者が不穏になる状態がある。不穏にならないような認知症フロアの物的環境の変更実施。

この他以外にも、興味を持つような様々な活動を提供。

《取り組みの結果と評価》

- 発症後、初期から中期の頃は何事に対しても強い拒否があった為、否定的な要素を含む声かけや接し方は極力行わないように職員が気配りし、統一したケアを心がけたところ、数人の職員がコミュニケーションを取る事が可能になった。
- 集中して好きな活動を行っている際、職員も一緒に行う事によって連帯感が生まれたのか、会話も弾み笑顔も見られるようになり Oさんの心に寄り添う事が出来たのではと感じた。
- 強い入浴拒否についても入浴前に気分が良くなるような活動を提供し入浴誘導するとスムーズに介助する事が出来る時もあった。

《まとめ》

- 現段階で特に治療法はないと言われているピック病の方と関わった事により、今まで以上に介護の工夫や、他認知症の方への対応の仕方など、とても勉強になった。
- 相手の気持ちに寄り添う介護というものを今まで以上に学んだ。
- Oさんへの介護的アプローチを経験した事によって、他の困難ケースのご利用者に対しても、落ち着いて自信を持って対応出来るようになった。
- ご家族、ケアマネージャー、他事業所との連携を今まで以上に密にはかりケアの質の向上を努める意識が生まれた。

《提案と発信》

- 受け入れ困難ケースの方が別の事業所(デイサービスやショートステイ)を利用する際、ご利用者と事業所お互いが困らないよう、各事業所間の実際にケアをしている介護職員のネットワークを作る必要性。
- 他事業所が受け入れ困難ケースの方に対してどのようにケアを実践しているのか、多くの事業所の現場の介護職員が参加出来るような事例検討会の提案。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。